朝鮮史の立場から
—親族関係から見た朝鮮・中国・タイ

宮　嶌　博　史

今回の研究会では、中国と東南アジアというテーマについて、朝鮮史、あるいは朝鮮研究の立場からの報告を依頼された。このメインテーマの背景には、東アジアと東南アジアということも含意されていると思う。従って朝鮮という東アジアの立場から、東南アジアを見るということが期待されているのだろう。

今日の話の内容は、それとは少しはずれるかもしれないが、親族関係に焦点を当て、朝鮮から見れば、むしろ中国と東南アジアは同じように見えてくるという話をしてみたい。

上田さんは「伝統中国」という本の中で、親族関係のあり方を三つに分けられていた。タイと日本と中国の親族関係をそれぞれ動詞的、形容詞的、名詞的親族関係と名付け、それぞれの特徴を述べられた。その動詞的親族関係というのは、「誰かが何をしてくれたから、それに対して何かをする」という関係で親族関係が成り立っていく。それに対して名詞的親族関係というのは、「本家」「分家」等の名詞が親族関係を規定していく。形容詞的親族関係は、輩行が尊いとか卑しいという形容詞によって、親族関係が秩序づけられる。

名詞的親族関係と動詞的親族関係の違いは非常に明瞭に理解できるが、動詞的親族関係と形容詞的親族関係は、どう違うのかよく理解できないところがある。この疑問が今日の私の報告の出発点となった。

例えば、日本人が韓国語を勉強する場合に困るのが、この動詞と形容詞の問題だ。日本語では動詞なのに、韓国語では形容詞になる言葉がたくさんある。日本語では、基本形を見れば形容詞と動詞はすぐに区別できるが、韓国語は形容詞も動詞も基本形は全く同じ形をしていて区別できない。例えば日本語の動詞で「異なる」「違う」という言葉は、韓国語では形容詞になる。動詞と形容詞は全く活用形が違い、日本人にとっては非常に区別しにくい。このことから考えれば、動詞的と形容詞的に対する感覚も、日本人と韓国人・朝鮮人では違うことになるだろう。名詞的と動詞的という対比が非常に明確なのに対して、動詞的と形容詞的という対比は、明確に区別しにくいのではないかという疑問がある。

また、上田さんのおっしゃる形容詞的親族関係という、輩分が尊いあるいは卑しいということで秩序立てていくのは、同じ宗族の中では秩序づける原理として有効に働く。あるいは異なる宗族の間でも、姻族で結ばれるような比較的狭い範囲では、秩序立ての原理として理解できる。だが、全く異なる宗族の間の関係は、輩分で秩序づけることはできない。形容詞的な親族関係というのは、限定された範囲の中での関係を秩序づける原理ではあるが、その範囲を超え

た異なる宗族同士の秩序は、何によって決定されるのか。これがもう一つの疑問点である。

そして、異なる宗族が結合していくときは、誰がどのような動機で行い、どういう手順で宗族というものを形成していくのか。その推進力と主導権は誰が握るのだろうか。その時点で生きている、輩分から見ても世代が一番上で、年齢的にも一番上の人が主体となって宗族結合が開始されるのか。だが、実際はそうではない。その当時の最も勢力の強い人達が、何らかの動機に基づいて宗族結合を行っていく。あるいは既にある宗族結合を強化させていく。その意味では、宗族関係自体を作り上げていく原理は、形容詞的とは言えないように思う。親族関係のあり方として、この形容詞的親族関係というのが、動詞的親族関係や名詞的親族関係と異なる類型として成り立ちうるのかという疑問を感じている。

朝鮮の同族組織は、ある意味では中国の宗族組織と非常によく似た形態をとっている。朝鮮の同族組織と中国の宗族組織を比較することによって、中国の特徴を考え、いま述べたような疑問点について、もう少し考えを深めていきたい。

中国では「宗族」という言葉が一般的に使われるが、朝鮮は「同族」という言葉が使われている。この両者には多くの共通点を見ることができる。その中でも最も重要なのは、中国の宗族も朝鮮の同族も、共通のある祖先を有した集団で、しかも父系で結ばれた血縁集団だということだ。しかも同じ宗族内・同族内では結婚できないという、外婚の単位としてあるという点も全く同じだ。共通点は限りなくあげることができるだろうが、ここでは異なる点にむしろ着目したいと思う。厳密に見れば、もっと数多く出てくると思うが、ここでは3つの違いを挙げることにしたい。この3つの違いは、本質的には一つの問題に帰着できる問題だと考えている。

まずその差異点を考えるための手がかりとして、一番目に本貫(籍貫)のあり方の違いがある。中国の宗族や朝鮮の同族には、姓の上にさらに地名がつき、どこそこの何氏という形で宗族・同族が形成される。ここで言う本貫とは、その姓の前に付けられる地名の部分である。朝鮮の同族では、同族集団の共通の祖先とされる人物、「始祖」の出身地を本貫としている。それに対して、中国の宗族では、始祖の戸籍の登録地(始祖が生きていたときの現住所)が本貫とされている。

これは一見、本質的な違いではないかのように思われるが、朝鮮の同族集団では、共通の祖先とされる人が「元々どこの人間であったのか」を尋ねるのに対して、中国の場合は、最初の祖先が「その時点でどこに住んでいたのか」をより重視する。朝鮮の場合の出身地は変わることがない。一つでしかありえない。だが中国の場合では、例えばこういう現象が起きてくる。元々は同じ祖先から発生していながら、途中で枝分かれした同じ姓の二つの集団が、それぞれ

異なる子孫を持つ。共通の祖先から何代目かの違う人物が、それぞれの宗族の始祖となる。そういう集団は、それぞれの時点における始祖の戸籍によって、新たに本貫が決められる。さらにその子孫で枝分かれして新たに派生した場合も、新しい宗族結合を作っていく。その場合にも、やはりその時点における始祖の戸籍の登録地が、新しく本貫として選ばれることになる。

ところが朝鮮では、共通の始祖から出た子孫達が枝分かれしていく場合にも、本貫は絶対に変わらない。同じ同族内の枝分かれは、同族内の派という形で枝分かれすることはあるが、派を作る時点で新たな共通の祖先の戸籍登録地を本貫とすることはない。一番目の差異点というのは、中国は枝分かれするごとに、全く新しい同族組織を作っていく可能性があるが、朝鮮では、認識された一人の人物から枝分かれしていく場合にも、それが別の同族集団を形成することはありえない。

その意味では、朝鮮の同族集団は非常に固定的で、一度枠が決まってしまえば、その中の集団が新たな別の同族集団を作るようなことは、少なくとも高麗中期以降はなかった。歴史的史料で明確に確認できる範囲では、そういう現象は見られないということだ。色々な同族集団の族譜を見ても、必ず唯一自分達だけの共通の祖先というのを持っている。さらに上に昇って、異なる同族集団と同じ始祖にたどり着くということは原理的にありえない。

同じ宗族・同族が、世代が経つに連れて枝分かれしていく場合に、朝鮮の場合は同じ同族内にとどまるが、中国の場合は枝分かれした集団が、新たな別の同族集団を作りうる。そういうことはごく当たり前に行われてきたのだろう。

今の話は上の世代から下へという経路で見てきたが、今度は逆に下の世代から上の世代へ遡りながら、同族・宗族の問題を考えてみたい。ここでも中国と朝鮮は非常に違う現象を見せる。上田さんの本の中では、〝絆を広げる〟という言葉で、ある宗族が自分達の宗族の枠を超えて、さらに他の宗族と結合する場合のあり方を探られていた。姓が同じでも本貫地が違えば、別の宗族集団ということになる。その二つの宗族集団が、事情によって結合する必要があった場合、この両者の共通の祖先を作り上げることによって、結合を果たしていく。その場合、それまでの始祖よりも上の世代に共通の祖先を作っている。つまり、宗族の高位のリニージを形成していく方法をとっていることになる。

上田さんによると、この祖先は実際に共通の祖先であった場合もあるし、全くのフィクションとして作り上げられた場合もある。さらに斯波さんの話によると、連宗通譜では姓が異なる場合でも、どちらかが姓を変えて同じ宗族になることもありうる。

朝鮮の場合、より高位のリニージを形成していくことはありえない。では朝鮮の場合にどの

ようにするのか。これには、私の最近書いた本『両班(ヤンバン)』の中で紹介した事例がある。安東という所を本貫とする、安東権氏という有名な両班の一族がある。この同族集団の族譜は何度も編纂されているが、新しい族譜には古い族譜に無かった集団が突然登場してくる。新しい家系が大挙登場して、始祖に非常に近い世代、四、五世代目ぐらいのところに結びつけている。こういう形で、従来は関係の無かった二つの権氏が結びついていく。

従って、このような方法では、同族集団に新しい構成員が入ってきたとしても、元々の族譜に収録されている基本的な構造は変わらない。それは残したまま、新しい集団を組み込んでいく形になる。中国のような形で、始祖よりも高位のリニージを作ることは絶対にありえないし、元々の同族集団がそういうことは認めないだろう。朝鮮の場合は、もとの構造が保存されたまま吸収していく形になる。

中国の結合の形は、ある意味で非常に不安定な構造と言えるだろう。現に上田さんの紹介では、より高位のリニージを形成して結びついた宗族集団も、やがては崩壊して、また離れていく現象が見られる。それはやはり構造的に弱いものを持っているからではないだろうか。

先程の本貫の問題でも、朝鮮の場合は枝分かれしても始祖は変わらない。中国の場合、枝分かれした時点の人を始祖とする場合が多く見られる。こういう点でも、朝鮮の同族結合と中国の宗族結合は、構造的に見れば強靭性において質的な違いがあるのではないかと考えている。

中国の場合、より高位のリニージが形成される場合の内部秩序の形成という点で、輩分が尊いとか卑しいとかという、つまり形容詞的関係が利用できるが、高位のリニージを形成していく動機自体は、むしろその時点で勢力の強い宗族側の主導で形成されていく。その関係は形容詞的な関係ではないと思う。そういう構造を作り上げていく動機と、その構造内部の秩序の形成という問題を考えれば、中国の親族関係というのは、形容詞的な関係という言葉では十分に説明できない部分がある。

一見非常に似ているように見える中国の宗族と朝鮮の同族から、なぜこのような違いというものが出てくるのか。この問題の答えを即座に出すことはできないが、「族産」のあり方の違いが、おそらくその問いに関係していると考えている。族産とは宗族・同族集団が所有している、土地や建物等の共有財産である。中国の宗族にも、朝鮮の同族にも族産というものがある。ただし、それがどのようにして作られるのかについては、やはり大きな違いが見られる。

朝鮮の場合、何よりも祖先の祭祀を継続して行うための財産として、相続される財産から分割されて族産が作られることになる。相続から控除されるものである。15世紀に制定された経国大典によると、祖先を祀るための費用を出す財産として、奉祀条を設定している。嫡子女、

つまり正妻の産んだ息子、娘達は、親の財産を均分で相続する規定だが、嫡子女の相続分の五分の一は、奉祀条として、祭祀権を相続する者が追加相続する。言い換えれば、朝鮮の相続制度において奉祀条を設定することで、祖先祭祀を継続して行う経済的な保障を行っている。

15世紀の段階では嫡子女の相続分の五分の一という、量的には比較的小さいものだったが、17、18世紀になるとそれは非常に肥大化してくる。しかも先祖祭祀権の継承者は長男に限られていく形になる。形としては長男優待相続、長男単独相続に近い形に変わっていくことになる。そういう時代変化はあるが、少なくとも15世紀の段階から、既に奉祀条という形で、祖先の祭祀を行うための費用は一人の人間に相続させて、祖先祭祀を継続して行う経済的な保障を行っている。これが族産の基になる。

中国の場合の族産は、相続分から控除して作られるのではなく、ある時期に非常に勢力を持った宗族内の人間が、寄付をする形で成立する。それは宗族内の結合を強化することが目的で、様々な土地や建物を寄付する。このようにして成立するのが一般的だ。言い換えれば、族産の設定や形成というものが、制度的に保障されていない。極端に言えば、宗族内の力のある個人の、自発的意志に頼っている。従って、族産自体の永続性の点でも、やはり中国と朝鮮では違いがある。こういう同族・宗族結合の基礎をなす族産のあり方の違いも、親族組織としての構造的な強さ、弱さに関係しているのではないかと考えられる。

婚姻の問題についても、少し話をしておきたい。婚姻とは、異なる血縁集団が結びついていく非常に有効な手段であるが、その婚姻のあり方は、異なる集団をどのように関係づけていくかという点で、非常に重要な意味を持つ。中国の明・清時代の族譜と、朝鮮の李朝時代の族譜を比べて見ると、女性の記述の仕方が非常に違っている。

中国の族譜では、女性は固有名詞で記載される。それと同時に、その嫁の父親の名前が併記されている。それに対して朝鮮の族譜では、女性は固有名詞では一切出てこない。女性の名前が記載されるかされないかが、一つの非常に大きな違いでである。

二つ目の違いは、中国の族譜では嫁の名前とその父親が書かれるだけであるのに対し、朝鮮の族譜では、その嫁の四祖が必ず記載される。嫁の父親、祖父、曾祖父、外祖父(嫁の母親の父親)を四祖といい、必ずこれを書くという原則がある。その女性の名前はどうでもいい。その女性の族的背景、どういう同族集団の人間であるのかが重要なのだろう。朝鮮の族譜における婚姻というものも、同族集団の結びつきを非常に強く意識した記載方式をとっている。

これは族譜だけではなく、李朝時代の戸籍の記載も全く同じで、戸籍に女性の名前は登場しない。単なる娘として記載され、娘が結婚している場合は、嫁ぎ先の夫の四祖が記載され、ど

の一族に嫁いだかということが記されることになる。

族譜における女性の記載方式も、中国と朝鮮では非常に異なっていた。朝鮮では、ある同族集団と他の同族集団との結合という面を非常に重視していたのに対し、中国の場合は、その時点における結びつきであり、族的な背景はさほど意識されていないのではないか。婚姻を通じての、異なる同族・宗族集団の結合という意識も、中国より朝鮮の方がはるかに強固であると感じられる。

朝鮮から中国を見た場合、同族的な結合というものが、構造的には朝鮮よりもはるかに弱いのではないか。社会の様々な関係の中で、同族的な結合が占める比重は、朝鮮社会に比べて役割が小さいのではないか。輩分的な秩序は、同じ宗族の内部や婚姻先との関係では意味を持つだろうが、全く関係のない宗族と宗族では、結びつけうる原理はなりえない。同郷のような地理的関係や、あるいは現代では企業内における地位のような、他の原理を動員しなければ結びつくことができないのではないか。

それに対して朝鮮の場合は、全く関係のない同族集団でも、例えば自分たちの同族集団が、これまでにどれだけの有力な祖先を輩出しているか、科挙の合格者を何名出しているか、あるいは代々どういう集団と婚姻を重ねてきたのか、そういうことを基準に比較していく。

もちろん現代の韓国社会でも、同族関係だけで異なる同族集団の関係が決定されるわけではないが、それでも常にそういうことは比較されている。ある同族集団の祖先が、別の同族集団の祖先の学問上の弟子であることが判明した場合、両者の同族の間の上下関係は非常に明らかになる。そういう原理が現代まで生き続けている。

朝鮮における同族結合、あるいは親族関係の持つ非常に強靭な長期持続性から見ると、中国社会の宗族的な結合が持つ役割や力は小さく見える。その形容詞的な関係というものは、ある部分的なところで働く作用でしかなく、同族結合そのものを作り上げていく原理になるのは、東南アジアのような動詞的結合関係ではないか。朝鮮の親族組織は、日本の名詞的親族関係の面を強く持っている。中国は日本や朝鮮よりも、むしろ東南アジアに近い類型ではないか。非常に挑発的な問題提起だったと思うが、上田さんの本を読んで非常に刺激を受けて、敢えて私なりに考えてみた結果を述べてみた。

コメント

松　原　正　毅

宮嶌さんの話は、できるだけ挑発的に仕掛けた部分もあると思う。東アジアの中で、お話のような朝鮮と中国の形の違いがなぜ出てくるのか。そこをやはり歴史的プロセスから考える必要があるだろう。

中国社会というものは非常に巨大で、一口で捉えることは非常に難しい。亡くなった橋本万太郎さんの説によれば、漢語の形成は五胡十六国の時代を中心に、タイ語系の言葉を話す人達の広がりの上に、アルタイ系の言葉を話す人達がかさなり、アルタイ語化したタイ語を話す集団が中核になってできていったというものです。この説はディティールでは色々な問題もあるようですが、大筋では東アジア地域で起こった流れの一つと考えてよいように思います。中国大陸の歴史資料がわかる範囲で、殷の時代以降から考えてみても、あの世界の中で異質な集団が接触し、様々な中国文明を作っていったことは明らかだと言える。

その時に黄河中心で物事を考えすぎると、中国の全体像というのは捉えられない。やはり、大陸全体を見る必要がある。中国文明は常に異質な集団との接触の中で形成されている。その核になっているのが、上田さん、宮嶌さんが議論されている部分なのだろう。

春秋戦国を通じて理想化されていった統治イデオロギーというものが、中国という文明の骨格を作っていった。イデオロギーの制度化が決め手だったと思う。中国の統治イデオロギーを制度化する一つの核を担ったのが、「社稷」や「宗廟」などという祖先祭祀を含んだ儀礼化ではないか。天子がそれを統べて支配する。空間だけでなく、時間までも支配する。その秩序の中に全ての人々が秩序立てられて位置する。その秩序に入れば、全てが中華の人々になっていく。そうすると、朝鮮の同族と中国の宗族との違いが生じたのは、中華世界においては制度化されたイデオロギーを背景にしているからではないか。

問題なのは、中国と朝鮮に違いがあることは認めるが、こういう違いがあるから「中国と東南アジアが近い」という結論が出せるかは疑問だ。ユーラシア社会を全体的に見れば、父系血縁集団はかなり普遍的にある。トルコ系でもモンゴル系でも、父系血縁集団が非常にドミナントであり、それが基盤になっている。非常に系譜意識が強い集団は多く見られる。モンゴルのジンギス・カンの系譜関係もその一つだろう。文字としての記録はなくても、現在のカザフでも、34代ぐらい前までの系譜を記憶している人もいる。このような集団の中にも、七世代の祖

先の中での婚姻関係を禁じるような、ある程度の制度化された部分を持つところがある。ただし、中国の宗族や朝鮮の同族のような、日常生活をも支配するようなものは全く無い。記憶の中だけの体系である。

この人達の集団形成の歴史は、「移動」という問題に関わってくる。この移動という言葉の内容については、まだ議論を必要とするが、少なくともユーラシアの北アジアから中央アジアにかけて広がる、父系血縁集団を社会の原理とした人々の民族形成、集団形成というのは、非常に自由でフレキシビリティが高い。多くの場合、やはり勢力のある人の系譜に入ろうとする。モンゴルが強ければモンゴルになり、トルコ系のカザフが強ければカザフになる。かなり自由に系譜関係を組み替えていく。このような可塑性や可変性の相対的な一つの極として、ユーラシア大陸の遊牧社会の例があると言えるだろう。

それと比較して中国の可変性を見れば、制度化されているという意味では、非常に可変性の幅は狭い。それでも常に系譜関係は書き換えることが可能である。朝鮮の場合でも、系譜関係に書き加えをしている事例がある。社会組織についてのイデオロギーが、制度化されているか、されていないかということが、重要なポイントになるだろう。その場合、東南アジアではイデオロギーの制度化があるのかないのか。あればどの程度のものなのか。いずれにせよ、社会構造での比較の場合は、制度化の問題が一つの決め手になると思われる。

ユーラシアの中で東アジアを見ると、中国文明が成立したことによって、元々あったものが見えなくなってしまったという状況がある。例えば、一例としてシャーマニズムの問題を考えてみると、中国大陸を含めて、北アジアから東南アジアまでつながっていた可能性は非常に強い。それが中国という巨大文明が成立することによってシャーマニズムの痕跡が消されてしまい、そういう連続性が見えなくなったと考えられる部分もあるだろう。

一時期、東南アジアと日本との比較で、社会構造の問題では「双系制」ということが論じられていた。それが当てはまる部分もあるし、それだけでは説明できない部分もある。日本の親族関係の問題にしても、やはり日本における地域的な違いというものは、どこかで前提におかなければならないだろう。本家、分家の問題にしても、かなり地域的な限定性が必要だろう。ユーラシア東部と東南アジアを比較する時には、その元々の祖型は何かという視野も入れておかなければならないだろう。

斯波さんが、中国大陸からの移民が東南アジアに出ていく一つの大きな分岐点として、13世紀以降という話をされていたが、その時代の再評価が必要ではないか。モンゴルが高麗軍と合わさったり、それが日本、東南アジアまで攻めてくる。あの13世紀におこった大変動の歴史的

評価が必要だと思う。東南アジアと特に東アジア、中国、朝鮮、日本を含めた地域を比較するときに、それが一つの歴史的な意味での原点になっている可能性が考えられる。

質疑応答

宮嶌　私の話の非常に不十分なところを指摘して下さった。ほとんどがこれから考えたい問題だ。中国と朝鮮の違いが出てきた歴史的経緯を明らかにする必要があるという指摘もあったが、その通りだと思う。

朝鮮の同族結合の元になったのは、かなり古い高麗時代に、同族集団の基盤になるような集団が見られる。そういうものが基盤になり、両班や同族集団が出てきたと思う。そういう意味で、非常に古い時代から父系血縁の意識を強く持っている面がある。

ところが一方で、15、16世紀ぐらいまでは、双系的な面も朝鮮社会は非常に強く持っていた。相続のあり方、結婚後の居住形態、あるいは族譜の編纂方式でも、16世紀ぐらいまでは母方や娘方を息子方とほとんど区別していない。そういう性格を一方で持っていたと思う。この両者が中国的なものに制度化されていくのが、やはり15～17世紀にかけてで、かなり長い時間をかけて制度化されていったと思われる。

制度化の契機は、13世紀のモンゴルの膨張と時期的には符合しているが、具体的にどう関係しているのかは、今のところ私には全くわかっていない。そういう問題をこれから考えていきたいと思う。

17世紀頃、中国の宗族に当たる同族集団というのが、朝鮮でも明確に形成されてくる。それが制度化されてくる背景は、双系的な社会が父系重視に変わるという事では説明できない。それ以前からの父系意識の強さも同時に組み込む必要があるだろう。

上田　朝鮮の同族集団の族産で、長男優待相続や奉祀条という話が出たが、その土地の名義は長男のものになるのだろうか。

中国の方でも族産の形成に二つのパターンがあり、ある有力者が寄付する形と、もう一つは相続する財産の一部分を親の名義のままにして残しておく場合がある。その運営は祭祀を行う者が担う。あるいは、多くの場合は小作地で、小作料を基金として祭祀を行う。おそらく親の名義のままにしておくというところに、ある種の中国の特質があるのかもしれない。

族譜における女性の記述だが、中国の一般的な族譜の場合には、例えば徐さんのところに李というところから嫁が来た場合、徐李氏と記載されるのが一般的で、いわゆる固有名詞は基本的には記載されない。特殊な例ではそういう族譜があるのかもしれないが、浙江

省で私が見た範囲では、そういう記載になっていた。

やはり大きな違いとしては、中国の場合では四祖というのは書かれていない。その嫁の父親についての記述があるのは一般的だが、四祖まで書かれたものは見たことがない。朝鮮と中国の族譜の違いとして、四祖を書くか書かないかというのは大きいと思う。

本貫のあり方や絆を広げるあり方が、中国は可変的であり、朝鮮は固定的というところは非常に勉強させていただいた。中国においては宗族という制度ができあがる前に、儒教的な宗族性を支える関係観念が先にあった。中国と朝鮮の大きな違いは、そこに由来するのだろう。宗族制度の方が後に出たために、可能性のための同族という範囲が、もう一つ設定される感じがする。

例えば同姓であれば、記録もないような昔に遡ると、もしかしたら同族かもしれない。周の時代までいけば、正統的な観念からすればみんな同族だという意識もある。同姓であれば可能性としての同族という意識は、常に持っている。だから先に遡って結びつけても抵抗感がない。

朝鮮の場合は同族制度の方が入り、その後で、その制度に強制されるような形で親族観念が形成されてくる。その結果、可能性としての同族というのは考え難いという状況がある。中国と朝鮮に違いが生まれてくるのは、このような経緯の違いが関係しているのかもしれない。

山田勇　今回の問題提起と議論から受けた印象は、中国というのは虚像ではないかという事だ。やはり中国はいくつかに分割して考えなければいけない。特に研究者はそうしなければ捉えきれないと思う。上海から海南島までは島嶼部東南アジア。雲南、貴州、江西、四川の一部は、大陸部東南アジア。チベットはチベット。新彊とかモンゴルのあたりは遊牧民の世界。大興安嶺の地帯は北方森林地帯。これらの周辺を取り外していくと、今ここで議論されている中国の像と一致するのではないか。つまり朝鮮に近い中原のあたりの、ごく少数の世界だけを中国世界とイメージして議論しているように思う。960万平方キロ、人口13億というような、大世界を一つにまとめて議論するということがそもそもおかしい。最初の作業として、もう少しきめ細かく中国を分割して考えてみてはどうか。

斯波　今までは制度的な記録をめぐって中国をコンバージェンスの方から捉えられていた。最近では実態調査が行われて、むしろダイバージェンスの方で考えられ始めている。一方では開放問題も起こっている。開放を認めたのは、経済が遅れているという事で、それは政治問題とも関わってくる。

経済地理や人類学では、もう中国をいくつかに分割して捉え始めている。中には中国18省をいくつかの「大地域」で分けている人もいる。そうしなければ、イギリスや日本と比

べる時でも、サイズが大きすぎるし、ダイバージェンスが激しすぎる。それを突き詰めて考えれば、地方主義や地方史の、実体の整備が必要だという事になるだろう。そういう事を抜きにしては、もう進まないというところに来ている。

それからもう一つは、族産と族譜における統治イデオロギー、支配イデオロギーの制度化という問題だが、その場合ルーチナイゼーションという問題もあるだろう。時代につれて、それはもう日常化してしまったのだ。その意味では、族産というものは12世紀頃から成立し始め、しかも南に行くほど強い。南進型の開発との関わりが窺える。それまではエリート中のエリートしか族譜は作らなかった。だが、中級エリートや下級エリートが出てきて、真似をし始める。それをルーティンの問題として取り上げて、結合するための戦略として族産を作り始めた。

中国は徹底的に均分相続である。財産は分割され、ライフサイクルとしては、一族も経営者も百年ももてばいい方だ。それを維持させるために、いくつもブランチを作る。そのブランチの中で成功した者が族産を作る。全部が作っていくわけではない。

朝鮮の場合は古くからあったと思うが、中国の場合、「族」というものはかなり新しいもので、ここ千年の問題だと思う。漢族が何かして統合し、正統イデオロギーを作り上げる。それに関わったものがクローズアップされているにすぎない。あまり統治イデオロギーという問題に還元しようとすると、抽象的にならざるをえない。その意味では、その原理に沿ったものがあるか無いかという議論であるべきだ。実際に運営しているものを見れば、特に華南の族では戦略的な要素の方が強いと思う。